IWATE 教育総研ニュース

No.8　2021.9.16
岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所
〒020－0022
岩手県盛岡市大通一丁目１－16
岩手教育会館4F　岩手県教互センター内
TEL／019-623-4432　FAX／019-652-9535
E-mail:j.sato8252@gmail.com

リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～

「ぶどう栽培が教えてくれたこと」

鈴　木　寛　太
（ぶどう農家）

略歴
- 1991年東京都出身
- 神奈川大学経営学部卒業後、2014年4月に関東の企業に就職
- 2015年5月に退職後、同年8月に「花巻市地域おこし協力隊」として花巻市大迫地域に移住
- 2018年5月にぶどう農家として新規就農。同年7月末に「花巻市地域おこし協力隊」を卒業後、「花巻市集落支援員」として、引き続き大迫地域で活動。2021年3月末で「花巻市集落支援員」を卒業後、独立し、本格的にぶどう農家として活動する。

「農業」というのは、テレビの中の出来事だった。「移住定住」という言葉が盛んに使われる前から、地方で若者が田を耕し、畑に野菜の種を撒き、小屋を建てたりする生活を茶の間から観ていた。テレビに映し出される内容は大変そうだけども、どこか楽しそうだったし、働く中に生き甲斐さえ感じられた。テレビの中の出来事で、他人事だからひとつの娯楽となっていたのだろう。だからと言って自分が農業をしたいか？と言われれば、微塵もやりたい！と思ったことはなかった。それが今では、ぶどう農家として、農業ど真ん中に自分はいる。

岩手県花巻市大迫町に移住してから、ぶどう農家になるなんて、2015 年に移住した当時ははっきり言って 0%であった。けど、どうして、生業としてぶどう栽培を選択したのか、移住の経緯を含めて少し話してみたいと思う。

僕が岩手を知ったのは、2011 年の東日本大震災がきっかけだった。当時は大学 1 年生も終わる頃、春休みをぼんやりと過ごしていた。4 月からの大学２年生をどうやって過ごしていこうか？なんて考えていた頃であった。実家の自分の部屋で大きな揺れを感じた。窓の外の電信柱は大きく揺れて、電線に止まっていたカラスが一斉に飛び立つ。また、不気味で大きな地鳴りを聞いたのは生まれて初めてであった。一軒家で 3 階建ての実家は大きく揺れた。揺れも長い。いつまで続くのか本当に恐怖であった。「ついに関東大震災が来た！」脳裏にはその言葉が浮かんでいた。

長かった揺れが収まった。奇跡的に物は落ちたりしていない。テレビから流れるニュースでは、震源は東京ではなく東北となっている。これは只事ではない。そう直感的に思った。余震が次から次へと来る。テレビの中で東北沿岸が壊滅的になる瞬間が映し出される。被害が甚大であることは誰が見てもわかることだった。

それから何日か経って、東北で何が起きているのか、自分に何か出来ることはないか。「人の役に立ちたい！」と本格的に思ったのは生まれて初めてだったかもしれない。出来ることは何かを探して、まずは献血から始まったが、現場に行かないといけないのではないか？と思うようになった。丁度その頃、僕が通っていた大学で東北復興のボランティアプログラムが立ち上がった。行きたい気持ちはあったが、僕が行ったところで力になれるのか？そう思って足踏みをしていた。けど、2011 年 9 月に初めて岩手に行くことになる。

震災がもたらした被害は想像を絶するものであった。沿岸の光景は今でも脳裏に印象深く残っている。誰もいない町にガードレールはひしゃげて、ビルは津波に破壊され、ガラス窓が割れ、洗濯機なのか冷蔵庫なのか、とにかくビルの窓ガラスを破壊して突き刺さっていることだけは分かる。それは、津波の威力がどんなものなのかというのが証明されている。

ボランティア活動は単純作業で、僕は役に立っているのかわからなかった。そんな気持ちを抱えながら、関東に帰ってきた。大学にはボランティア活動の支援センターというのがある。学生と現地を繋ぐ役割だ。

ふと、支援センターに行くと、そこのスタッフの方が「現地の○○さんが寛ちゃん次はいつ来るの？」って言ってたよ。と話してくれた。正直なところ、「こんな僕が人に求められるんだ」そう思ったことで、何度も岩手に足を運ばせていただいた。いつしか、岩手の○○さんに会いたいから、ボランティア活動をするようになっていった。

時は流れて、就職活動に入る。ボランティア活動は計 7 回となり、岩手で何か出来ないか？と思うようになる。けど、現実的ではない。結局関東で就職したが、「僕の人生はここで終わるのかな」なんて考えていた。

日に日に岩手のことが忘れられず、思いが募る。大学時代に大好きで何度も行った岩手。社会人になったら、繋がりは「はい、終わり。」それでいいのか？じゃあ、あの 4 年間は何だったのか？自問自答が続いた。

そんなある日。「地域おこし協力隊」という話を友人から聞いた。これになれば岩手で生活も出来る。働ける。考えは単純だったが、答えはすぐに出た。

2015 年 5 月に 1 年 1 ヵ月勤めた会社を辞めて、岩手に行く準備を整えた。

この話をすると、「せっかく入った会社をよく辞めたね？」なんて言われるけれど、自分が死にたいほどやりたいこと、行きたいところがあった場合、自分の人生は一回きりだし、後悔したくない人生の選択をしたいと思うようになっていた。そんな考えになったのは、やはり震災の影響だったんだと思う。現地の方から聞いた震災の話、人は思ったより簡単に死んでしまう。自分が考えてるほど、人生はもしかしたら長くないのかもしれない。そんなことを考えたら、今、行動しないと後悔してしまうから、僕は準備を整え、行動した。

移住したのは、花巻市大迫町で、「地域おこし協力隊」として、大迫地域のぶどう農家、ぶどう産業を盛り上げるというミッションであった。主に岩手県内外で学生を呼び込み、ぶどう栽培やぶどう農家と交流していき、関係人口作りを行った。また、農家さんと話をするうちに、課題が浮き彫りになっていく。農家さんが困っていること、町の課題等、それは机に座っているだけではわからないリアルな声であり、地域の課題は現場にあり、答えも現場にあると思って奮闘した 3 年間だった。

気が付けばあっという間に月日が流れて、「地域おこし協力隊」を卒業する日が近づいていた。そんな時、花巻市から「集落支援員」という制度を紹介される。協力隊卒業後も町と関わっていきたいと思っていた自分にとって、ありがたいと思った。それと同時期に、知り合いの農家さんからぶどう園地をやらないか？という話をいただく。自分でぶどうを育てることに興味もあったが、自分に務まるのだろうか？という不安もあった。けど、自分がぶどうを育てること

が出来れば、外に対しての PR になるんじゃないか？とも思った。

最初は 10a（アール）という小さな面積でぶどうを栽培した。やってみると本当に大変で、想像以上であった。毎日のように園地に出向き、その時のタイミングでやらないといけない作業を行う。作業をサボれば、そのツケは後に必ずやってくるから手は抜けない。丁寧に栽培しても、動物や自然災害にやられてしまう可能性は大いにある。とある農家さんは、農業は博打だと言う。儲ける年もあるが、収穫直前で全滅することもある。その苦労話を聞かされていたが、僕は突き進んだ。

何故、そんな大変なことがわかっていて、突き進むことが出来たのか？と言うと、たくさんの地域の方達の応援や、ぶどうを楽しみにしてくれている友人達がいたからである。

いざ、初めての収穫をして、様々な人にぶどうを食べてもらい、感想を聞くと、たくさんの「美味しいね」という声が聞こえてきた。僕は、その一言の為に約 1 年間頑張れると思うと、農業は不思議なものだと思った。現在(2021年)では、約一丁歩の面積を栽培している。今年 3 月で集落支援員も卒業して、いよいよ独立して農家となった。実は移住前、いつか独立したいと思っていた。これは移住前のひとつの夢だったんだと思う。けど、その夢は農家として独立する夢ではなかったと思う。独立。カッコよく言えば起業であるが、内容は何でもよかった。それがたまたまぶどう栽培であった。

ここで思うのは、 僕にとってぶどう栽培は「目的」ではなく「手段」である。生きていく手段。地域を盛り上げる手段。

つまり働くということは、「目的」ではなく、「手段」である。

話は少しズレるが、例えば、子どもたちに世界に通用する教育を教えたいと思い、学校の先生になりたい！と思ったとする。学校の先生になっても疑問を持ち、他の教育に関する職業に転職することもあるかと思う。ここで伝えたいのは、学校の先生になることは手段である。目的は「子どもたちに世界に通用する教育を教えたい」なので、探せばもっと違う道が出てくるわけである。そのぐらいの視野をもって、生きることを柔軟にしていくことができれば、面白いものや出来事に出会うと思っている。

写真提供：鈴木寛太さん

特別寄稿 実践報告 「誰かが生きにくい社会」をなくすために

熊　谷　貴　典
（一関市立大東中学校）

- まだ本当の自分を認められていない人たちがたくさんいるんだということがわかりました。
- 誰もが生活しやすいようにするためには、いろんな人がいると思って、名前の呼び方や質問などの言い方に配慮しなければいけないと思った。
- LGBTQ+ への理解が深まったし、同時に日本ではあまり認められていないことも知った。麻衣さんのように LGBT を広められる活動をしている人が報われる世界になってほしい。

盛岡市議会議員の加藤麻衣さんの講話を聞いての生徒の感想である。

今年度大東中の２学年の総合学習では、３つの柱を立てて学習を進めている。１本は職場見学を通して、働く人の気概を感じることを目的とした労働学習。２本めは、大船渡や釜石の震災当時の人々の行動と大東町のあの日の聞き取り調査を通して記録を残すことを目的とした復興学習。そして、３本めが日本社会を支える構成員の多様な存在とそれぞれの苦悩と社会の課題を知り、より良い社会のあり方を議論することを目的とした人権学習である。

加藤麻衣さんの講話は人権学習の中で、LGBT についての理解と平等な社会の実現のために子どもたちが今後探究していくきっかけとして計画した。加藤麻衣さんを知ったのは、この IWATE 教育総研ニュース４号だった。岩手で LGBT の権利拡大のために行動している人がいること。その実現のために市議会議員になった若者がいること。その人を私たち岩教組のシンクタンクである岩手総研が取り上げたことに勇気と親近感が湧き、佐藤淳一所長に連絡を取り加藤さんと繋いでもらった。

「民主主義社会の発展は、女性、黒人、少数民族等のマイノリティーの権利拡大によって実現されてきた」という政治学者の山口二郎さんの言葉を全国教研新潟集会でいつか聞いたときから、社会科の授業や教室で、少数派の見え方や意見を議論の中にいかにして取り入れようか、ということを模索している。90 年代のバブル崩壊から「透き通った閉塞感」という言葉が日本社会の若者に漂っていることに対して、思春期の子どもたちに学校で何ができるのかということも考えてしまう。

その答えの１つは、比較と競争とは別の世界で

の自己実現の経験を少年期や思春期にたくさんすることであろう。

そして、他者と比べて劣等感を感じる年頃。他者からどう見られているのかが人生の中で一番気になる年頃。テストや部活動、教室や行事の取り組みでも、比較されることや競争させられることが当たり前となってしまっているような思春期の子どもたちにとって、自分のやりたいことを実現する経験をすることや、自分と同じような悩みを抱えている人たちと協同して世界を築こうとしている人の生き方に触れることではないだろうか。確かな学力よりもずっと確かな民主社会の実現のための学習だ。

子どもたちと加藤麻衣さんとの出会いはきっとそうなるだろうと期待していた。加藤さんとの打ち合わせでは、中学生の発達段階や集団の性格、趣味や価値観が多様である今の子どもの傾向など、子どもたちのことを語り合った。その打ち合わせがあったからだろう。講話では、LGBTQ+ の意味についてや、LGBT 関連の世界や日本のニュースも紹介をしていただいたが、子どもたちの今からスタートし、これからにヒントや希望を与えてくれるような子どもたち目線の講話だった。

加藤麻衣さんが死ぬまでに実現したいことを“BUCKET LIST”（バケット リスト）という印象的なネーミングで紹介してもらった。

- 生き甲斐のある世界を拡張する。
- 自殺率を下げる。
- 自由の女神になる。
- 同性婚をする。
- 初対面の人と映画の感想を語る。
- 死ぬほど笑う。

それぞれのリストに関連づけながら、加藤さんの経歴や海外で見て感じたこと、思いを共にする仲間や岩手や世界の若者たちの勇気ある行動を縦にも横にもエピソードを織りなしながら、着実に自己実現に向かって前進していることが伝わってくるお話であった。

2021プラン

生きる

学習計画

活動内容	日付	時数	累計時数
オリエンテーション	5月7日（金）	1	1
あの年の自分を語る会「先生編」	5月14日（金）	2	3
あの年の自分を語る会「みんな編」	5月21日（金）	2	5
人権学習１「女性の権利」	5月28日（金）	2	7
被災地訪問学習「オリエンテーション」	6月1日（火）	2	9
職場訪問１－１　職場見学アポどり	6月4日（金）	2	11
被災地訪問学習「大船渡FWからの震災復興列車で釜石」	6月8日（火）	6	17
人権学習２「家督問題」	6月11日（金）	2	19
職場訪問１－２　事前学習	6月18日（金）	2	21
人権学習３「LGBT」	6月25日（金）	2	23
職場訪問１－３「大東町」	7月9日（金）	6	29
職場訪問１－４　ふりかえり	7月12日（月）	2	31
人権学習４「アイヌ・アメラジアン」	8月27日（金）	2	33
職場訪問２－１　職場見学アポどり	8月31日（火）	2	35
人権学習５「障がい者の権利」	9月3日（金）	2	37
職場訪問２－２　事前学習	9月10日（金）	2	39
職場訪問２－３「一関市街」	9月14日（火）	6	45
職場訪問２－３　ふりかえり	9月15日（水）	2	47
総合訪問　法教育「テーマ設定」OR「復興討論」	9月29日（水）	2	49
人権学習７「ニューカマー編」	10月1日（金）	2	51
萩香祭ステージ発表に向けて	10月４～22日	14	65
人権学習８「在日朝鮮・中国編」	11月12日（金）	2	67
法教育）弁護士なんでも相談会	11月26日（金）	2	69
まとめ	12月3日（金）	1	70
Total			**70時間**

BUCKET LIST は子どもたち自身がこれからの生活を前向きに歩んでいくために大きな勇気を与えてくれるものであると同時に、人権学習のまとめで子どもたちがいつも考えている平等な社会の実現、すなわち「誰もが生きやすい社会」の具体的なイメージとつながるものであった。

加藤さんは「誰もが生きやすい社会」の対義語は「誰かが生きにくい社会」であると説明した。誰かが生きにくい社会であるという現状は、誰もが生きやすい社会にはまだなっていないのだから、

「やりたいことができない人がいないか？」
「やりたいことすら言えない人がいないか？」
「あなたが力になれる人がいないか？」

ということを意識することが大切であると教えてくれた。合理的配慮の起点だなと思った。

私たちは、誰もが差別や偏見がなく、誰もが生きやすい社会の実現を願っている。子どもたちの授業のまとめにもそういった表現が多いし、決して間違いではない。だからと言って、具体的に、

今社会の中でどのような立場の誰が生きにくい状況にあるのかという個別具体的な話については議論のテーマにはならず、そういった状況を生んでしまっている社会の構成員の一人であるという当事者意識をもって、今の生活をどうするのかということを考えることは棚上げにすることが多い。「誰かが生きにくい社会」であることはそのことに気づかせてくれた。

「議員になってよかったことはありますか？」

「同性婚が認められている国は世界のどんな地域に多いのですか？」

普段はあまり発言しない子どもたちからいくつかの質問が出された。

「議員になったことで、埋もれていた意見を議会や社会に発表することができました。また、議員になったことで多くの声が寄せられるようになりました。」

「同性婚はヨーロッパで認められている国が多いです。おそらく第二次世界大戦中のホロコーストの歴史があることから、人権尊重の意識が高いのだと思います。」

質問や感想に対して、エピソードや自分の考えを示しながら丁寧に答えていただいた。

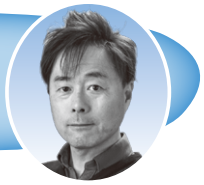
- ✍ BUCKET LIST を新たに知った。無理して自分らしさを消さなくてもいいと思った。
- ✍ BUCKET LIST によって、自分らしさが見つかる、やりたいことを明確にすることで誰もが過ごしやすい社会をつくることができると知った。LGBT の人と平等に過ごしていくために、LGBT の人との接し方などを知ることができた。
- ✍ 「他人のやりたいことを尊重する」、「アライ（英語で味方という意味）」、「自分が力になれる人がいないか」など、他人を考えるという言葉が多く出たと思った。LGBTQ+ の人に関わらず、他人のことを考えて行動できるようになりたい。また、多数派を普通だと思わないようにしたい。
- ✍ 私は麻衣さんの話を聞いて「誰もが生きやすい社会」の対義語の「誰かが生きにくい社会」にならないよう、私ももう少し LGBT に興味を持とうと思いました。また、LGBT の方々に対し、差別や偏見があったことを知り、改めて差別や偏見をしてはいけないし、平等が１番だと思いました。
- ✍ 「LGBT だから」などと知ろうともせずに避けるのではなく、お互いがお互いを知りあうことが平等な社会の実現につながると思う。

子どもたちの明日への展望が広がったようだ。子どもたちが卒業するまでに実現させたい BUCKET LIST も子どもたちと一緒に考えて行こうかなと、私自身の展望も開けてきた。

今年度の人権学習は、ジェンダー講話と対談、LGBT 講話と弁護士と共にした法教育が終わった。２学期は外国人労働者、アイヌ民族、在日朝鮮人、障がいをもつ人々が生きにくいと思っていることについて講話をしていただく予定である。今年播いたタネが来年 3 年生になったときにどのような探求テーマとして芽を出し、一人ひとりが自分の考えの花を咲かせ、地域の人々や社会との対話を通して実をつけていくか楽しみである。

OPINION（オピニオン）

岩手県教職員組合　書記次長
青野　大祐



未来ある新採用者のために

2017 年 4 月、多忙で有名な小学校へ私は赴任した。担当学年は２クラスの５年生。新採用教員 A さんとペアを組み、私は学年長とのこと。「無理です」率直にそう校長に申し上げた。「新卒と新任では 1 年間を見通せない」そう感じていたからだ。しかし、変更されることはなかった。

新年度が始まった。社会人一年生として夢と希望を抱いて着任した A さんは、すべてにおいてやる気に満ちていた。「早く学校に慣れ、教員としての自分を確立したい」そんな思いがヒシヒシと伝わってきた。しかし、学校現場に慣らし運転はない。新学期が始まれば、不安でも最前線に立って「先生」を務めなければならない。私はできるだけ学年集会や合同授業を組んで A さんの負担軽減を図った。しかし、新採用者にはあまりにも厳しい労働環境だったのだろう。勤務時間内では終えられない業務量、それに加えて特別な支援を要する児童が多数在籍する学級担任として A さんは日に日に疲れ果て、同年 6 月に精神疾患で病気休暇を取得。同年１２月に復帰したが再発し、翌年 2 月に退職を余儀なくされた。

その知らせを聞いたとき、私はとてつもない自責の念に駆られた。不甲斐ない自分の力量が腹立たしく、また情けなく感じた。思い返される A さんのひたむきな姿。その若さ溢れる笑顔を追い詰めたものは紛れもなく学校そのものであり、一個人の問題として葬られることに憤りを感じていた。不甲斐ない先輩教員が最後にできること、それは A さんの名誉回復であり、そのために学校責任を問う公務災害認定請求を起こすことだった。

早速、この思いに賛同してくれる同僚たちと「初任者の公務災害認定を支える会」を結成し、休職するまでの経緯や超過勤務時間の精査などを行い、過酷な勤務実態を書き起こした。また、A さんと接点があった同僚に陳述書の執筆を依頼し、客観的な視点からも補強した。その結果、2020 年 6 月、地方公務員災害補償基金岩手県支部は、A さんの勤務実態と精神疾患との因果関係を認め、公務災害として認定したのだ。

この事案から、学校という職場とその働き方が、新採用者にとっていかに厳しく、過酷なものであるかが浮き彫りになった。民間企業であれば、まず電話応対から始め、徐々にその職に慣れる期間があると聞く。それに対して学校はどうだろう。新採用とは言え学級担任となる場合が多く、日々の授業や学級指導を一人でこなさなければならない。安易に助けを求められない環境の中、戸惑いや不安を抱えて教壇に立つストレスは計り知れないものである。同様の事案が繰り返されぬよう、ぜひ新採用者の業務や研修に関して早急な改善を求めたい。

例えば、担任等の責任ある業務から外すことで、学校や子どもを知り、職場に慣れ、教職を学ぶ時間とゆとりを保障できるだろう。可能であれば、副担任のような立場で教科指導や学級指導等に携わり、教員としての自分を徐々に培う期間があったらどれだけありがたいことか。きっと時間外勤務も大幅に減るにちがいない。また、初任者研修の根幹を在籍校における実地研修に位置づけ、日々の教育活動そのものから学びを得るプログラムへと転換するのもよいだろう。それにより、先輩教員の授業参観等の機会も保障され、より体験的に経験を積むことができると思われる。

当然、これらを実現するには新採用者の配置に併せた、さらなる教職員定数改善や加配措置が必要となる。教員採用試験の志願倍率が年々低下している本県だからこそ、他県に先んじて大胆かつ適切な労働条件を整備し、若者たちが安心して志願できる環境を整えるべきではないだろうか。

2021 年 2 月、岩手県教育委員会は「岩手県教職員働き方改革プラン（2021 ～ 23）」を策定し、その実効化を進めているが、一方で、次世代を担う新採用者には、ワーク・ライフ・バランスを基軸とした働き方をしっかりと研修し、働くことへの意識改革を進めていく必要があるだろう。未来ある新採用者のために、教職員の働き方に対する「改革」と「育成」は、重要かつ急務な課題だと考える。

学校現場に渦巻く多忙化の波に新採用者が飲み込まれぬよう、実効性ある取り組みを講じて教職員の意識改革を進めつつ、健全かつ充実した働き方が確立されることをこれからも進めていきたい。

教室の窓から（7）

S 教頭の涙

S 中 2 年目の夏休みも終わり、文化祭取り組みの企画を始めた頃のある日、昼休みに生徒会室で執行部会議をしていた私のところに、クラスの生徒たちが駆け込んできた。

「先生、K が大変です! さっき、安全ピンで耳に穴をあけました。今、何人かで保健室に連れて行って手当をしてもらっています。」

「そうか、ありがとう。区切りがついたら行ってみるから、保健室の T 先生によろしく言っておいてくれないか。」

「わかりました。」と言って、生徒たちは保健室に行った。

一区切りついたところで保健室に行ってみると、K が T 先生に耳の傷の消毒をしてもらい、「ピアスをしたいなら、自分でお金を稼げるようになってからちゃんと病院に行ってやってもらうんだよ!」と諭されているところだった。

「そろそろ 5 時間目が始まるから教室に戻ろう。」と促すと、K はおとなしくついて来た。

その日の 5 時間目は学級活動の時間で、文化祭取り組みの役割を話し合う予定になっていた。話し合いが合唱の係にさしかかって指揮者の立候補をとったところで、突然 K が手を上げた。今まで、どんな係も自分から率先してやることはなかった K が手を上げたので、周りの生徒たちもびっくりしている。

「朝練習にちゃんと来るの?」

「みんなに歌の指導はできるの?」

などと、K への質問が相次いだ。

結局、指揮者には 3 人の生徒が立候補したが、それぞれの決意を聞いた上で多数決を取り、K は残念ながら落選となった。

それから約 1 ヶ月の間、教科展示の作品づくり、学級展示の調査活動や展示物の製作、合唱練習などが進んでいった。

文化祭まで残り 1 週間ほどになったある日、帰りの会の合唱練習の時に、指揮者の Y が「みんなが真面目に練習しないから、オレはもう指揮者はやめる!」と言い出した。そして、帰りの会では、どうしたらよいか話し合いになった。

「一生懸命に歌っている人もいれば、そうでない人もいる。クラスがまとまっていない。」

「中学校最後の文化祭でみんなと最高の合唱ができるように練習を頑張りたい。」

私は、意見が一段落したところで、生徒たちに聞いた。

「Y はみんながちゃんとやってくれないから指揮者をやめたいと言っている。このままやめさせていいのか?みんなは、Y の指揮で合唱をしたいと思うのか?そうでないのか?」

「・・・・・」

少しして、K が恥ずかしそうに手を上げた。

「オレは、なかなか朝練習にも来られなかったけど、Y の指揮で合唱を歌いたい。だから、指揮者は続けてほしい。」

それから、再度 Y に指揮者をお願いしてみんなで頑張ろうという意見が続いた。

文化祭当日、みんなで練習に取り組んだ『聞こえる』という曲が満員の体育館に響き渡った。ステージの上には、汗をかきながら指揮をする Y の姿や、その指揮に集中してついていこうというクラスの生徒たちの姿、そして誰よりも大きな声で一生懸命に歌う K の姿があった。

歌い終わって、K の肩の力が抜けるのが見えた瞬間、目頭が熱くなって慌てて横を向くと、近くに座っていた S 教頭がハンカチを目に当てているのが見えた。体育専門の普段は厳しい先生だったが、目が合って声をかけてくれた。

「いい合唱だったな。K があんなに全力で歌うなんて思いもしなかった。みんなの思いを1つにできる文化祭はやっぱりいいなぁ。」

K の歌声は、確かに S 教頭の心にも「聞こえる」ものになったのだった。私は、思いが溢れて「はい」としか言えなかった。（J）

IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。
http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html
QRコードはコチラから!